

ラック・バーがあった場所には新しいアパートが建っていて、昔日の面影は全くなくなっていた。休日には蒲の穂を使ってシャコを捕っていた静浦の海岸は、すっかり埋め立てられて中国版ディズニールランドができていた。

K君の家に行く登り坂の入口には門ができて、「ロシア海軍療養所」と書いてあったが、衛兵がいるわけでもない。坂を登ってK君の家の前まで行った。外観は以前と少しも変わっていない。あのころの出来事が次から次へと浮かんで、しばらくはその場を動けなかった。今は、K君もお母さんも亡くなっていてこの光景を見ることはなく、半世紀の月日の流れは無情だった。今、この家で暮らす人には、私の胸中を去来する感情を理解できないであろう。あの激動の時代の記憶は、我々の世代と共に消えていくのだ。

こうして、この年の旅は私にこの世のはかなさを教えてくれたが、同時に私が生きた時代の証に、あの体験を記録に残しておきたいという気持ち

ちを起こさせてくれた。

私とその家族の戦後は、全体としては幸運だったというべきであろう。もつと、もつと悲惨極まりない経験をした家族も多い。「引揚げ労苦記録」を残すには資格が足りないかもしれないが、私の人生にとつては最も重要な時代であり、出来事でもあり、記録に残したいと考えて筆を執った次第である。

終戦に伴う二度の長旅

東京都 小川 国 壽

一 出生から終戦まで

私は昭和六（一九三一）年二月二十四日に、父正香、母スキの五男として中国の青島市チンタウで生まれた。家族は八歳上の長男豊寿、七歳上の次男浄寿、五歳上の三男康寿、二歳上の四男彬寿、三歳下の六男恒寿、五歳下の捷寿、七歳下の八男敬

寿、以上八人兄弟と両親とで十人だった。長男は海軍士官、次男は大学生として内地にいたので、満州から引き揚げた私たちとは一緒ではなかった。

私たちは、昭和七年四月青島から満州国の奉天（瀋陽）に移って以来、昭和二十一年九月の引揚げまでの十四年あまりを満州で生活した。父は、のちに旅順工大となった旅順工科学堂の採鉱冶金科を大正三（一九一四）年十二月に卒業し、以来一貫して炭鉱関係の仕事に従事した。そして、父が転勤するたびに家族も一緒に移転した。私が住んだ場所と年齢は次のとおりであった。

青島	一歳
奉天	二歳から四歳
チチハル	五歳
新京（長春）	六歳
龍井	七歳
瓦房店	八歳
復県南海	九歳から十一歳

旅順 十二歳から十四歳
和龍 十五歳

この間に、私は小学校を三回も転校した。昭和十二年四月に新京の白菊小学校一年生に入學したが、翌昭和十三年四月には龍井小学校に転校して二年生を過ごし、昭和十四年には瓦房店小学校に転校して三年生、さらに四度目の小学校である南海小学校では、四年生から卒業までの三年間を過ごした。

昭和十八年四月、四人の兄たちが学んだ旅順中学校に入學した。第二次世界大戦の戦局が急を告げている時期で、ともに勉強できたのは一年生のときだけであった。二年生の夏休みの終わりころには動員がかかり、関東神宮造営工事に参加、連日もつこで土を運ぶ作業をした。

私が三年生になった昭和二十年四月から終戦の日まで約四カ月間、勤労働員で六十人の仲間とともに大連市甘井子の進和鉄工に配属された。この鉄工場は溶鉱炉を備え、銑鋼一貫作業を行う近代

式製鉄工場で、銑鉄、鋼の製造から、鋼の圧延その他一次加工、メッキ鋼材、針金、くぎなど二次製品の製造、各種機械の部品、戦時中のことで迫撃砲の砲身なども製造していた。工場では、日中両国の工員が生産に従事し、互いに協力して作業に従事する明るく、活気のある職場であった。私たち勤労働員生は十人前後の小グループに編成されて、それぞれ割当ての作業に取り組むことになった。私たちは、てい鉄の滑り止め金具を作る作業であった。グループのチーフは迫田さんという眼鏡を掛けた優しい人であった。

月曜から土曜日までは、毎日工場与えられた仕事に精をだした。宿舎と工場の往復は、四列縦隊に並んで歩きながら、学生当番長の指揮で軍歌や学校の応援歌を歌った。工場に着いたら一生懸命になって働き、できあがった品物を眺めては、でき映えに満足するという充実した毎日であった。宿舎は進和鉄工が勤労働員学生のために独身寮を開けて提供してくれたので、宿舎で生活して

いるのはみんな同級生で、のびのびとして楽しく、工場が休みになる日曜日は、だれかれとなく相手を選んで将棋に熱中したことが印象に残っている。

銑剣術の初段の資格を取得したことも、忘れられないことであった。教官は、小柄な五十歳前後の退役陸軍将校だったが、ユーモアに富んだ人で「大男、総身に知恵が回りかね。小男は、さんしょうのようにぴりりと辛いかもしれたものじゃ！」が口癖であった。この教官の指導で、同僚が大勢合格した。ときどき、街頭で煎餅チエンビンを賞味したことも、忘れられない思い出であった。こうして、緊張した戦時下ではあったが、のびのびと楽しい四カ月を過ごした。

二 北に帰る

終戦の八月十五日は、大連の空はこのほか青く澄んでいて、夏の日差しが容赦なく照りつける一日であった。勤労働員に従事していた中学生は、病人以外はそれぞれの場所で作業していた。

今日は、正午に天皇陛下が重大な放送をなさると知らされていたので、全員工場のクラブ前に集まり、今か今かと放送の始まるのを待っていた。いよいよ正午、玉音放送が始まり耳を澄まして聞き入ったが、雑音がひどくほとんど聞き取れなかった。

夕方になって、敗戦という思いも及ばぬ事實は動かぬものとなり、工場から支給されていた鉄製のやりの返納命令が出て、渋々これに従った。宿舎に帰ってからも、友達同士悲憤こう慨して議論はつきなかつた。

翌十六日は、急いで荷物をまとめ荷造りして、十七日には旅順中学校の寄宿舎に戻ったが、大半の学生が家族のところに帰ってしまっていて、宿舎はがらんとして静かだった。

私は家族が待っている日本とは反対方向の、新京よりさらに北方の和龍に行くことになったのである。同じ方向へ行くという一年先輩の栗原建二郎氏と、同期の林卓男君と三人一緒に旅順を出発

することにした。勤労働員に行っていた工場から、寄宿舎に送った荷物はまだ届いていなかった。持った荷物は配給の米二升を入れた袋一つだった。「帰省」と言えるのかどうか。和龍へのコースは次の通りであった。

旅順からは旅大線で大連、大連からは連京線で新京へ、さらに京図線で朝陽川まで行き龍井を経由して自宅のある和龍まで行くことになる。距離は鉄道だけでも千四百キロメートルであった。

八月十八日、三人は邦人が続々と南下する中、北上の旅を始めた。午後大連を出発する北京行きの列車に乗るために、午前中に旅順を出発した。大連までは定時に運行されたが、大連で乗車した新京行きの列車は、発車時刻が来ても一向に出発の様子はなく、夜中になってやっと出発した。これが波乱の幕開けで、多難な前途を暗示するものであった。

列車は深夜の満州平野をひた走りに走った。金州・普蘭天・瓦房店・熊岳城・大石橋・蘇家屯・

奉天・鉄嶺・開原などを通り、翌十九日の昼ごろには四平街に到着した。ところが、ここから先へは当分列車を運行する見通しは立たないとのこととで、やむを得ず四平街の満鉄の社宅にお住まいの栗原氏の友人を訪ねてみることにした。しかし肝心の友人は、軍に召集されていて不在、留守をしていた奥さんは、たった一人になって不安だったらしく、訪れた私たちを救いの神と思ったように、どうぞ都合の付くまでいつまでも一緒にいてほしい、と頼まれる始末であった。私たちにとっても願ってもないこと、まさに地獄に仏であった。結局、奥さんの好意に甘え寢食のお世話になり、ここを拠点に毎日駅に行つては列車運行についての情報を集めた。そしてついに四日後、二十三日に列車が新京に向かつて運行することをつかんだ。

八月二十三日、一面識もなかった私たち三人の宿泊を、快く引き受けてくれた奥さんに厚くお礼を言つて、駅に向かった。何とか列車に乗り、や

れやれこれで新京までは無事に行けると思つたのに、新京の七つ手前の公主嶺駅でストップしてしまった。今度は訪ねていつて泊めてくれる知人もいないので、駅構内の引込線に停車した列車で寝起きすることにした。持つて来た米を飯盒で炊いて、飢えをしのいだ。列車での宿泊、飯盒炊き、すべて初めての体験だった。着替えなど持つて来なかつたから、何もかも出発のときそのままであつたが、入浴はおろか洗濯などもできるはずはなかつた。この駅に停車中のことであつたかどうかの記憶は定かではないが、ソ連兵を満載して南下する列車を目撃して、敗戦を実感した。

このころになると、あちこちで略奪が始まつていた。駅に隣接した関東軍専用の倉庫は、略奪の標的になつていた。戦争末期には、民間ではいろんな物の不足が深刻になつていたので、倉庫の中に山と積んである軍用物資を見て、軍はこんなに豊富に物資を確保していたのかと驚くとともに、腹立たしくさえなつた。私たちも悪いかなと思つ

だが、背に腹は代えられず、乾パンと軍靴をもらって、長旅に備えることにした。

公主嶺に停車して三日目、八月二十五日の夕刻列車は、やっと動きだした。いよいよあと一時間で新京に到着すると喜んでいた矢先、ひと駅手前の南新京駅で停車させられ、「日本人は全員下車せよ。命令に従わない者の生命は保証しない」と言われ、やむなく下車した。たまたま近くに乗り合わせていた日本人が、私たち三人が困っているのを見て、新京市内にある満州電電の社宅へ案内してくれた。四平街以来、人の親切をしみじみと味わった。

翌朝、新京駅に行き、列車の運行状況を聞いたところ、明日は吉林行きの列車が出るということであった。駅への行き帰り、町の要所要所に完全武装のソ連兵が立っているのを見て、その物々しさに、恐れと前途の多難なことが身にしてみた。

翌八月二十七日早朝、お世話になった電電社宅の方に厚くお礼を言って、新京駅に向かった。私

は、小学校一年生のときに一年間この街に住んだことがあったので、見覚えのある建物や風景をあちこちで見つけては懐しい思いをしていたが、今はそんな感傷に浸っていられなかった。三人は、急ぎ足で新京駅に向かった。

京図線始発駅新京を出発したのは、朝の九時ごろであつたらうか。昼ごろには吉林駅に到着した。駅の案内では、この列車は当駅止まりでこの先には行かないという。街に日本人が集まっている避難所があると聞いて街へ出て、ひと晩お世話になった。

翌二十八日早朝、吉林駅に行くこと敦化までの便があるとのことで、教えてもらった列車に乗り込んだ。昼下がりに敦化駅に到着し、吉林のように日本人避難所を探したが、敦化では既に、日本人全員が市内の小学校に隔離収容されていた。三人は一応その小学校に行ってみたが、その雰囲気から一度収容されるとどうも身動きできなくなるような気がして、学校には入らず、また街に

戻った。街で朝鮮人の学生がいたので、何か情報を得ようと思つて立ち話をしていると、中国人に化けた二人の元日本兵が近寄つて来て、「この三日間何も食べていないが」と無心され、以来この二人とも行動を共にすることになった。

五人であちこち寝る場所を探し回つた挙げ句にたどり着いたのは、駅近くの十数棟の空き家になつた満鉄社宅だつた。ここに社員が住んでいたのは、終戦直後までだつたらしい。その一棟に入り込んで、ふろ場に寝ることにした。八月末にもなると、満州の朝晩はぐつと冷え込むから、小部屋のふろ場はその点でも比較的暖かく過ごせるし、人に見つかりにくい場所でもあると思つたからであつた。

夕闇が迫るころ、ふと耳を澄ますとコツコツと家の中を歩く靴音がしたので、五人は息を殺し、かたずをのんで、互いに身を寄せ合つてちぢちぢまっていた。だが、だんだん足音が近づいて来る。ついにガラツと戸が開いた。中国人だつた。

恐らく物あさりに来たのだろう、中にいる五人を見ると、一瞬はつとしたように息を凝らしていたが、やがて何もせずに立ち去つた。アツという間の出来事だつたが、立ち去るまでをあんなに長く感じたことはなかつた。もしあれがソ連兵だつたら、恐らくただでは済まなかつただろう。ほかの四人の胸中は知る由もないが、視線を合わせた一瞬の息が詰まるような恐怖感は、数十年経つた今でも鮮やかに思い出す。五人は畳をドアに立てかけて、狭い洗い場で丸くなって眠つた。

恐怖の一夜が明け、八月二十九日になつた。動物が本能的に危険な場所から逃げるように、五人は急いで駅に向かつた。だが敦化で一緒になつた二人の元日本兵と行動を共にするのは、我々まで兵隊と思われると危険だと判断して、駅の雑踏に紛れて二人と離れることに成功、元の三人だけで図門トモン行きの列車に乗ることができた。列車は九時ごろ発車して、正午近くに朝陽川駅に到着した。ここにきて初めてこの北帰行の旅が無事になつた。

か終末を迎えられそうだと感じた。三人は街中にあった日本人避難所を探しあて、安全に一夜を過ごせる宿ができたことにほっとした。

八月三十日、列車運行の見通しが全くないので、やむなく三人は徒歩で龍井に向かうことにした。山を越えるなど楽な道のみではなかったが、やっと龍井市の近くまでたどり着いた。市内に入る手前の海蘭川に架かる橋のたもとで、ソ連兵の検問を受けた。そのとき、林君の持っていた袋からピストルの葉きょうが見つかって詰問される騒ぎになったが、ピストルそのものを持っていないかったので、なんとか通過することができた。三人は龍井市内へと急いだ。

午前十一時ごろだったろうか、ついに龍井市に到着した。これまで三人で助け合って行動を共にしてきたが、栗原さんとは名残を惜しみながらお別れした。私は、林君のお宅でお世話になることになった。林君の御家族の皆さんも無事でおられ、長旅に疲れきった二人を温かく迎え入れてく

ださった。御家族には、旅順からここに帰るまでの状況をいろいろお話した。その夜、林君宅に泊めていただいたときの厚遇は、生涯忘れることはできない。一夜安心して眠れたので、私はすっかり疲労が取れ、さわやかな気分であった。林君のお母さんに、ゴマをまぶし海苔でくるんだおにぎりを作って頂いて、八月三十一日早朝、林君宅を後にした。

和龍の私の家は、ここからさらに南西に五十数キロメートル離れた炭鋳街にあった。和龍までは石炭搬出用のローカル線が昭和十八年に敷設されたが、むろん戦後は一切運行していなかった。私が旅順中学校在学中に、教練の課程として大連から旅順までの五十数キロメートルを、学校生徒全員が一昼夜かけて踏破した経験はあったが、今度は一入旅であった。多少歩きにくいのが、線路上をただひたすら歩いた。

和龍の一つ手前の官地駅にたどり着いたときには、日はとつぷりと暮れてしまった。このあたり

は、大きなトラが出没して人畜を襲うことがあると聞いていたので、用心するに越したことはないと思ひ、駅員に事情を話して駅に泊めてもらおうと考えた。事務室にいた駅員は若い朝鮮人であったが、私の願いを快く聞き入れてくれ、駅員仮眠用のベッドに寝かせてくれるという。そして親切にも蒸しトウモロコシを食べさせてくれた。こんな親切が私の脳裏に今も焼き付いている。この夜もぐっすり眠れ、心身の疲労はすっかり取れて、目覚めはさわやかであった。

翌九月一日、この日も朝から快晴であった。駅員に心からのお礼を述べて八時ごろ出発した。そして昼前の十一時ごろ、ついに和龍の我が家にとどり着き、この長い旅は終わった。私が到着したとき、私の家族はもちろん、炭鋺の社員も家族もみんな「よく帰ってきたね。良かった、良かった」と声を掛けてくれた。平時なら二日の行程を二週間かけて、しかも日本とは反対の和龍に帰ったのは、何としても家族と一緒にならなければ、

この先どうすればよいのか分からなかったからである。私一人で、何も知らない日本に引き揚げることなど思いもよらなかった。家族に会わなければ、自分の運命は真つ暗だという危機感のようなものが心の底にあつたからである。

こうして苦難と波乱の連続であつたが、私の北に帰る旅は無事に終わった。和龍では日本人社員とその家族は、安全を確保するため一戸建ての社宅を出て、みんなで独身寮に住まうことにした。独身寮の部屋はもともと狭いので、家族の人数によつては二室を使つて生活を続けることにした。

三 引揚げまでの生活

二十年九月一日から翌二十一年九月一日まで、偶然のことながらきつちり一年、ここ炭鋺の街、和龍で今までと立場が逆転して敗戦国民としての惨めな生活を送ることになった。華僑ならぬ日僑俘になつたのである。ソ連兵の略奪と暴行、国共両軍の勢力争い、元関東軍兵士や開拓義勇隊の逃避行、民衆裁判など、世情は混とんとしていた。

そんなさなかに、一番仲良かったすぐ下の弟が他界したのは、私にとつて無念な出来事であった。弟の病気はジフテリアだったが、血清がないために手の施しようがなかった。さらに心残りだったのは、私が中共軍の炊事係のアルバイトで和龍から離れた奥地にいたために、弟の死を看取つてやれなかったことである。弟の亡骸は社宅西方の丘で荼毘に付して埋葬した。

そんな八月半ばごろ、どこからともなく引揚げの情報が頻々と流れるようになっていたので、あるいはと心待ちにしていたが、ついに確実な情報が入り準備に取りかかった。

四 引揚げの長旅

終戦の日から一年余、ついに待ち望んでいた引揚げが始まった。偶然だが、私が和龍に戻った日からちょうど一年目の、昭和二十一年九月一日であった。結局、この旅は五十日間、旅程五千キロメートルに及ぶ旅となったのだった。

和龍から引き揚げる日本人の一人は、満州炭鋌

株式会社社員とその家族二百八人、元関東軍野戦重砲兵第二十聯隊第二中隊の隊員七十五人、東盛瀋開拓義勇隊の六十人。総計三百四十三人であった。各自それぞれ引揚げの旅に必要な炊事用具、食糧、衣料などをリュックサックに詰め込んだ。我が家では、二週間前に他界した弟の遺骨をリュックサックに入れて、一緒に引き揚げることにした。正午過ぎ、幼子や病弱者をいたわりながら、そろつて炭鋌街を後にした。

夕暮れになり、和龍駅近くの県公署前広場に到着した。「今夜はここで野宿する。明早朝列車に乗り、和龍を出発する」と指示があった。駅構内では、引揚列車を編成するために車両を引つ張った機関車が、忙しく動き回っていた。野宿地では、携帯禁止の品物の有無を調べるための荷物検査が行われた。待ちに待った引揚げが現実のものとなつてみれば、喜びと悲しみがこみ上げてきて、複雑な感慨が去来する一夜であった。

早朝、乗車が始まった私たちのために準備され

た車両は、有蓋貨車であった。プラットホームから客車に乗るのは違って、貨車の床は目よりも高い。先に貨車に飛び乗った兵士や義勇隊の男性が、子供や女性を引っ張り上げたり下から押し上げたりして、短い時間で全員が乗車を完了した。そして列車は発車した。

午後、列車は龍井駅に到着したがなかなか発車する気配がない。引揚列車はすべて臨時列車なので、定期列車の間を縫って走らなければならぬ。しかも、ダイヤ編成のベテランである満鉄職員は、収容所に収容されているので、不慣れな人たちがその作業をしている。そのうえに線路は単線なのであった。待機時間が長くなるわけであった。

龍井駅から朝陽川駅までは約十二、三キロメートル。朝陽川駅で車両を乗り換えた。乗り換えたのも有蓋貨車であった。朝陽川駅から次の老頭溝^{ロウトウコウ}駅間は約二十二キロメートル、昼に発車した列車は夕方老頭溝駅に到着し、その日は貨車に寝た。

この超鈍行列車にも都合の良い点があった。自炊のための時間が十分に取れたことである。薪を拾い、米が炊きあがるまでには、五分や十分の短い停車時間ではどうにもならないのである。飲まず食わずの旅になることもなかった。もう一つ良いことがあった。列車が止まるとどこからともなく現地の人々が現れ、パン、饅頭、米、粟、高粱^{リャン}などを売りに来た。私たちはなげなしのお金しかなかつたが、お陰でひもじい思いをせずに済んだのだが、現地人の商魂にも頭が下がった。

敦化駅到着は早朝だった。老頭溝駅と敦化駅間は百キロメートルあまりの距離があり、停まらずに走ったので、はじめて列車に乗った心地がした。敦化では二時間ほど停車し、次の蚊河^{ムカガ}駅には夕方到着した。駅から少し歩いたところの収容所に入った。兵舎と陸軍病院であったのを、引揚者の収容所にしたらしい。荒れ果てていたが、貨車に寝るとのは違って、ゆっくり横になって寝ることができたので、疲れがとれた。朝食後整列して

老爺嶺へと出発した。ここ蚊河から何キロメートルの間は中共軍と国府軍の間の非武装地帯、すなわち境界線となっていたので、出発のときには、中共軍の兵士が「国府軍に我々のことを悪く言うなよ」と言ったのが今でも耳から離れない。私たちの集団には女子供が多いので、歩みは遅かった。夜になってたき火を囲み野宿をしたが、眠れなかった。

我々の集団は、荷物を背負い山道を歩いてようやく老爺嶺に着いた。みんな慣れない行軍で疲れ切っていた。老爺嶺からは国府軍の統治下に入った。老爺嶺からは石炭専用の貨車に乗ることになった。乗車するところから雨が降り始め、だんだん雨脚が強くなってきた。列車は山中を走っているのも、やたらトンネルが多かった。出たと思うとまたトンネルという状態が続いた。出れば雨、入ればトンネルに響く、ごう音と逃げ場の無い煙と煤に襲われ、みんな泣きたくなるほどひどい状態となった。そのうち列車は破壊された鉄橋の手前

で停まった。鉄橋は川の真ん中付近でV字型に川の中に落ちていた。みんなは無蓋車の下に潜って、雨の中線路をまくらの露営となった。

翌日の八日、渡し場まで二、三十分ほど歩いた。数隻の筏にそれぞれほぼ五、六十人ずつ分乗して、川幅二百メートルをピストン輸送することになった。流れは急ではなかったが、渡りきるまで相当な時間がかかった。

全員川を渡ってからまた歩き、三時過ぎに日僑俘吉林特別収容所に到着した。ここから先の各収容所は乗船待ちの引揚者で満杯になっていて、引揚船が入港するたびに、乗船した人数分だけ逐次港に近い収容所に移動するという仕組みになっているらしかった。ここの収容所には一週間滞在、持ち物は二回検査された。

九月十五日、吉林を出発することになって、駅の操車場に行った。今度は木材専用の貨車らしく、平らな台車に囲いは何一つ無いので貨車の真ん中に荷物を置き、その周りに女と子供、その外

側に男が座るようにした。吉林出発は午後になった。

九月十六日無事新京駅に着いた。列車が停車したのはやはり操車場であったが、日本政府の係官がいて、貨車の台車に歩み板を掛けてくれたのである。女子供は楽に降りられて係官に感謝し、喜んで新京の土を踏んだ。係官の先導で緑園収容所に入った。和龍出発から約半月、夏服では肌寒い気候になっていた。ここで初めてDDTの洗礼を受けた。米軍の将校が国府軍兵士を指揮して作業を進め、その献身的な行動に感動するとともに、DDTの威力に感心した。たった二度の散布で、縫い目に潜んでいたあのしぶといシラミが死滅した。

なる季節になってきたので、一日も早く旅が終わることを願ったものだった。

九月二十三日、いよいよ新京を出発することになった。乗車前に荷物検査が行われ、DDTが散布された。乗車するのは再び木材専用貨車であったので、前と同じように荷物を貨車の真ん中に置いて周りに座った。四平街や鉄嶺など大きな駅では三、四時間も停車したので、そのときに炊事し食事をした。このころから、停車中の列車を狙って、とび口を持った強盗が出没しはじめ、日を追うに従ってその回数が増えてきた。列車は奉天を出発したが、またまた停車して動かなかった。動き出したのは夜明けであった。寒くて一晚中眠れなかった。

新京から約六百キロメートル離れた錦州駅に着いたのは、九月二十五日早朝であった。下車して北大営収容所に入った。収容所では用意していた粟がゆが支給された。冷え切った体には実においしかった。ここでの食事は一日二食ではあった

が、粟、高粱が支給された。主食の心配が無くなると、みんなの関心は副食に集まるようになった。支給される副食では物足りない人たちが、北大営收容所の前の大きな市場で野菜やいろんな物を買った。市場の従業員は、引揚者たちが少しでも多く買い物をしてくれるよう懸命に呼びかけていた。市場のネギや白菜は本当においしかった。

この收容所では、引揚者の所持金は一人千円、持ち物も一人何キログラムまでと重量制限が決められた。我が家がこの制限を越えるほどの物を持つていなかったのは、ちょっと寂しい気がした。ここ北大営の收容所には十日ほど待機していた。

十月五日、十日ぶりに乗船港葫蘆島への移動の指示が出た。葫蘆島は錦州の南西約七十キロメートルのところにある港で、以前は貨物専用の港であった。今まで旅客用に使われていた大連、安東、営口などは国共内戦のために中共軍の支配下に入ってしまったって使えなくなったので、日本人の

引揚げは葫蘆島が使われるようになった。

いよいよ乗船の順番が訪れ、朝九時ごろに錦州を出発した。錦州收容所には満州各地から集まった引揚者が多かったので、貨車には以前より多くの人たちが乗った。急停車や思わぬ揺れで、女子供や老人が振り落とされるのではないかと心配したが、約二時間で無事に、葫蘆島駅に到着したことは何よりの幸いであった。日本からきていた引揚援護局の係員が、我々を温かく迎えてくれた。あか抜けてスマートな米軍兵士も、皆親切に世話してくれた。ここでもDDTの散布を受け、各人が申告した現金を集め、預り金証明書をもらった。

引揚船はアメリカの二種類の貨物輸送船が活躍していたが、一つはリバッテリー型で、今ひとつはLSTと称する船で、港には交互に入港していた。我々が乗ることになったのはリバッテリーの船であった。いよいよ乗船のときがきた。岸壁から船に吊り橋が架けられ、船員の指示に従って次々

に乗船していった。女子や子供には船員が介添えしてくれた。船倉は三段の床になっていて、本来は貨物がびっしり積み込まれるのだが、代わりに引揚者が乗ることになった。

全員が乗船を終え、それぞれの席を確保して落ち着いたのは昼過ぎであった。船は汽笛を合図に岸壁を離れ、静かに出港した。いよいよ中国大陸とはお別れであった。私は甲板に出て、葫蘆島港や付近の風景をじっくり眺めていた。満州奥地からの引揚者専用の港として脚光を浴びているこの港は、周囲を低いはげ山に囲まれて殺風景な港であった。私は、無事に日本に帰れるという嬉しさと、もう二度と中国大陸を訪れることもなからうという寂しさをかみしめていた。

港を出てしばらくたつたとき、山下水生さんの水葬が行われた。山下さんは乗船直前に亡くなった日本軍の初年兵だったが、同年兵や船長はじめ船員に見守られて、遼東湾の海深く永遠の眠りについた。船は汽笛を鳴らし大きく旋回して、山下

さんに別れを告げて水葬式は終わった。私にとつては初めて見る厳かな儀式であった。

船は遼東湾を南下し続けていたが、やがて遼東半島も視界から消え、ポツカイワン渤海湾を南下して黄海に入った。私は船室にいて退屈すると、甲板に出て海を眺めるのが楽しみであった。トビウオが船と競争するかのよう飛ぶのを見て歓声を上げることもしばしばあった。そんなことを繰り返しているうちに、船から見えるようになってきた朝鮮半島は中国よりはやや緑が多かった。

航海が始まって四日目、緑濃い日本の山々が視界に入ってきたとき「ああ、これが日本か」と、初めて見る故国日本の景色に接して、感慨にふけた。満州では、秋から冬にかけては山ははげあがって一面褐色なのに、日本の山野は青々としている。それだけで喜びに胸が膨らんだ。

十月十三日、船は波荒い玄界灘を乗り切り博多湾に入港した。すぐにでも上陸が始まるものと思っていたが、湾内に停泊待機となった。乗船者

の中から伝染病の陽性反応が出たための検疫隔離であった。

一週間の隔離期間が過ぎ、十月十九日ついに上陸のときがきた。船は昼ごろ東港に接岸し、引揚者は祖国日本への第一歩をしるした。早速、引揚援護局松原収容所で引揚証明書交付、預かり証明書と引き替えに現金の受領、郷里までの乗車船券の支給など入国の手続を済ませた。

私たちは博多駅から鹿児島本線の夜行列車に乗車した。乗ってみて、日本の列車は満州の列車に比べると小さいなと思つたが、今度はまぎれもない客車だから、ちゃんとした椅子もあつて乗り心地は快適であつた。窓から見える緑濃い美しい自然、たわわに実つたみかんが珍しかった。銘々座席に落ち着いたら、安心と疲れが出て眠りについた。

翌十月二十日早朝、串木野駅に到着、ここまで一緒に来た仲間たちに別れを告げて下車、串木野港まで歩く。十時出帆の甕島航路の「和丸」に

乗船、里、江石、中甕、平良、藺牟田、長浜、青瀬の各港に寄港して夕方四時過ぎ終着の手打港に到着、はしけに乗り換えて上陸、ようやく母の実家に帰り着いた。こうして約五十日、約五千キロメートルに及ぶ引揚げの長旅は終わった。家では祖父、叔父、叔母、五人の従姉妹弟、それに海軍から復員していた長兄が迎えてくれた。感激の対面であつた。帰国第一夜は、夜更けまで四方山話が弾んだ。

五 結び

私たち家族は「なかい」と呼ばれている農機具倉庫兼農作業用の離れに落ち着いた。以来約三年間、農作業を手伝いながら、新制中学校を卒業した。手伝いとはいえ農業を本格的に体験できたことは、私の人生にとって有意義であつた。

やがて旅順中学校の恩師や友達の話が、少しずつではあつたが分かつてきた。そして東京での感激の再会が実現した。手紙の交換や再会したときの話を聞くと、大連にいた連中の引揚げは満州

奥地にいた者の引揚げよりも遅くなったということであつた。

敗戦という国家の一大事が、国民一人一人に重くのしかかった事実を忘れてはならない。そして、決して戦争という忌まわしいことが起こらないことを念じつつこの手記を終える。

私の故郷 満州！

東京都 金野 達子

一 父の渡満から私の出生まで
私の父、金野福治は明治二十二（一八八九）年に、岩手県東磐井郡の千厩で生まれ千厩農蚕学校（現在の県立千厩東高校）を卒業してから、岩手県内の養蚕指導に従事していましたが、徴兵検査で甲種合格となり騎兵部隊に入隊して、随分、鍛えられたそうです。

無事に二年間の兵役を終えて故郷に戻り、明治

二十七年生まれの、同じ県の大迫町出身のヨ子と結婚しましたが、大正六（一九一七）年に関東庁巡查を拜命し夫婦で渡満したのです。

渡満後、関東州旅順の警察学校に入つて教育を受けたのちに、安奉線（安東・奉天間）沿線の重要地点である本溪湖^{ホンクイコ}の警察署に赴任しましたが、そこで大正九年に長女の孝子が生まれました。その後と同じ安奉線沿線の連山関^{レンザン}に転勤、大正十一年には次女の安子が生まれました。

さらに、やはり同じ沿線の石橋子の警察署に転勤し、そこで大正十五年に私、達子が三女として生まれたのです。渡満して約十年、その間に三回も転勤して、それぞれの勤務地において子供を授かったということになりますが、このことは私にとつては全然記憶に無いことです。それから数年たった後には開原という所に移りました。

二 開原生活の思い出

開原は、連京線（大連・新京間）のちょうど中間ぐらいのところで、奉天（瀋陽）から北に約百